◉骨関節・軟部組織疾患6

座長　金谷　文則

1-7-37　大腿骨頸部骨折の機能的予後に影響する因子の検討

[1]岡山赤十字病院整形外科，[2]岡山赤十字病院リハビリテーション科
高木　俊人[1]，片岡　昌樹[2]，小西池泰三[2]，那須　正義[1]，東原信七郎[1]，高田　英一[1]，土井　武[1]

【目的】大腿骨頸部骨折は，骨粗鬆症と転倒などの低エネルギーの外傷によって起こる高齢者における代表的な骨折であり，年々増加の一途を辿っている．現在までに大腿骨頸部骨折に関する機能的予後において様々な研究がされ，予後に影響する因子として，性別，年齢，受傷前の歩行能力，認知症や内科的疾患の有無，術前の歩行能力等が挙げられている．今回我々は，当院における大腿骨頸部骨折における機能的予後に影響する因子を，統計学的手法を用いて検討した．【対象および方法】2008年11月から2010年11月までの24カ月間に大腿骨頸部骨折と診断され当院整形外科で入院し理学療法を実施した71例．なお多発外傷などが大腿骨頸部骨折以外に認める症例や，受傷前の歩行が困難であった症例や最終歩行能力の確認が困難であった例は除外した．71例に対し以下の変数を後ろ向きに調査を行った．独立変数は年齢，性別，術式，認知症，術後疼痛，睡眠導入薬の使用とし，従属変数を最終実用歩行能力とした．統計学的検討はロジスティック回帰分析を行った．【結果】患者数は71例，平均年齢は80.9歳であった．歩行能力に最も関連のあった因子は認知症であり，最終歩行能力に有意差を認めた．ほかの因子では男性，術後疼痛，高齢も関連のある傾向があったが，有意差は認めなかった．【考察】上記に挙げた因子を検討することで，術後早期より機能的予後を予測できると考えられた．

1-7-38　大腿骨頸部骨折リハにおける在院日数に関連する因子の検討：リハ医学会患者データベースの分析

[1]熊本大学医学部附属病院リハビリテーション部，[2]熊本リハビリテーション病院リハビリテーション科，
[3]やわたメディカルセンター，[4]日本福祉大学社会福祉学部，[5]日本リハビリテーション医学会
大串　幹[1]，田中　智香[2]，本田　佳子[1]，西村　一志[3]，水田　博志[1]，山鹿眞紀夫[2]，近藤　克則[4]，
データマネジメント特別委員会[5]

【はじめに】大腿骨頸部骨折のリハにおけるプロセス指標として在院日数に着目し関連する因子について検討を行った．【方法】リハ医学会患者データベース登録データ(2010年12月版)を用い，退院先，主治医・リハ医の関与，認知症各項目と在院日数との関連を見た．【結果】分析データ数は17施設より806例(検討項目毎に記載無し・不明を含む)である．退院先は自宅以外在宅(47例)60.7日＞自宅(411例)54.8日＞療養目的転院(35例)50.7日＞老健(53例)50.5日＞特養(34例)40.1日＞リハ目的転院(51例)30.3日の順であった．主治医診療科はリハ科(188例)65.4日＞整形外科(520例)40.1日，リハ医関与については，主治医がリハ科専門医(119例)61.9日＞リハ科コンサルタント医(58例)56.4日＞整形外科主治医(32例)47.2日であった．なお自宅退院率はリハ科67.6%，整形外科を含むリハ科以外は45.8%であった．認知症は，有(233例)53.2日，無(186例)50.7日と差はなかったが，自宅退院率は有(97例)41.6% 67.6日，無(114例)66.7% 51.4日であった．【考察】在院日数は自宅直接退院の場合に長く，リハ目的の転院で最短であった．主治医がリハ科医師の場合，在院日数が長くなる傾向がある一方，自宅退院の割合は高く，多くのリハ介入されている可能性がある．【まとめ】在院日数は，退院先，リハ医の関与で差があるが，認知症の有無に差はなかった．入院病棟種別の記載のないデータもあり病床種別層別化によるより詳細な検討が必要と思われた．

1-7-39　京都府での2008年における高齢者の大腿骨頸部/転子部骨折の発生実態調査

[1]京都府立医科大学大学院医学研究科身体支持制御・骨代謝学，
[2]京都府立医科大学大学院医学研究科運動器機能再生外科学(整形外科)，[3]亀岡市立病院整形外科
堀井　基行[1,2]，辻　吉郎[2,3]，三上　靖夫[2]，藤岡　幹浩[2]，上島圭一郎[2]，久保　俊一[2]

【目的】京都府での2008年における高齢者の大腿骨頸部/転子部骨折の発生実態を，骨折型に分けて調査した．【対象および方法】調査は大都市部の京都・乙訓，京都府最北部から丹後，中丹，南丹，そして京都市の南に位置する北山城の各医療圏で，中核病院を中心に計13病院で行い，65歳以上を対象とした．対象病院の一般病床数は合計4151床で，整形外科を標榜する救急告知病院一般病床総数(大学附属病院を除く)の24.1%にあたる．調査内容は，骨折型，年齢，性別，左右，受傷場所および受傷原因とした．【結果】骨折総数は1005例で平均年齢は83.6歳，うち頸部骨折は462例(女性380例)で平均年齢82.1歳，転子部骨折は543例(女性424例)で平均年齢84.8歳であった．頸部骨折では屋内受傷が69.1%，転倒によるものが76.4%，転子部骨折ではそれぞれ71.6%，79.4%であった．医療圏別の頸部骨折の割合(%)は，京都・乙訓，丹後，中丹，南丹，そして北山城の順に，52.9，34.0，44.5，47.5および37.0と地域差があり，京都・乙訓医療圏では頸部骨折が転子部骨折より多かった．【考察および結論】京都府全体では過去の全国調査と比較して骨折型割合，受傷場所，受傷機転などがほぼ一致していた．しかし骨折型割合は医療圏により異なり，年齢以外の要素も骨折型ごとに異なった影響を与えた可能性が疑われた．